

## 編集後記

『人間科学研究』第6巻第2号をお届けします。今号は、昨年11月に本学を会場として開催されたスポーツ心理学会の第39回大会（金沢星稜大学人間科学会が共催）の特別講演「オリンピックとスポーツ心理学」の抄録を巻頭に掲載しました。陸上競技男子やり投げの現役選手（アテネ・北京・ロンドンのオリンピック日本代表）で世界陸上2009銅メダリストの村上幸史選手をお迎えし、競技生活におけるメンタル面についてお話しいただきました。オリンピックの大舞台におけるアスリートの心理状態は如何なるものか、経験者ならではのエピソードを交えたメンタルコントロールのコツを間近で聴こうと、陸上競技に勤しむ石川県内の生徒・学生・指導者の方々も多く来場されました。あらゆるストレスを克服し、最高のパフォーマンスを見せてくれるアスリートは、常に少年少女の憧れです。

本学教員からは、こども学科7件、スポーツ学科1件の研究成果が寄せられました。

井上好人氏は、「北陸の宝塚」と呼ばれた栗崎遊園について娯楽文化や身体表象の観点から考察。軍国主義に入る直前、誰もが余暇を楽しめるレジャー施設があったとは驚きです。

川村氏は、英語の副詞 *out* について考察。アウトを含むカタカナ語も氾濫していますが、多義の諸相を弁別しないと、日本語の意味を曖昧にしたまま感覚的に使用してしまいます。

清水氏は、国際交流学習を教育現場で普及させるための研修プログラムを開発。自国に誇りを持ち、グローバルな視野から世界と協働する次世代を育成する方法として有効です。

高氏は、自殺者まで出た大津事件を契機に、全国の学校現場で深刻ないじめ問題の反省として教師の聴く力について考察。苦悩する子どもの話を聴く具体的な道筋を示しました。

谷中氏は、音と人間の関係について環境や教育の観点から考察。我々は常に音に取り囲まれて生活していますが、心が安らぐ音楽も苛立つ騒音もあり、音波の受容力が必要です。

寺井氏は、保育士が子育て支援の前提として、保護者の支援もしなければならない点を強調。「発達障碍」「育児不安」などの今日的な課題に臨床心理士として取り組んでいます。

村井氏は、ICT活用教育のパイオニアとして実証的研究を継続。今回は、IWBとTPCを用いた協働教育プラットフォームを構築し、学習課題の追求と効果について実証しました。

井上明浩氏は、障害者スポーツ指導のパイオニアとして香港弱智人士體育協會を訪問し、組織間の連携と統合を期した各競技の普及強化や選手育成システムについて模索しました。

どうぞ高覧ご批評くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2013年3月吉日

編集委員長 馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学会に帰属します》